九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

土家族の擺手節と茅古斯について

東，英寿
鹿児島大学

https://doi.org/10.15017/2244533

出版情報：九州人類学会報. 22, pp.16-25, 1994-12-01. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

土家族の擺手節と茅古斯について

東　　英寿

1．土家族について

中国の55の少数民族の１つである土家（Tǔ Jiā）族は、２千年以上の歴史をもち、古来より中国南西部の湖南・湖北・四川３省の隣接する山岳地帯に居住する山地民族である。土家族の紹介は、すでに別稿のなかで試みているので一部重複することになるが、ここでは族称、言語および現在の人口分布にしぼって簡単に説明しておく。(1)

土家族は古代の巴人にその起源をもつと考えられているが、土家という族称そのものの成立は、土家族居住地域に漢族が流入してきたことと密接に関連している。(2) 宋代以降漢族が土家族居住地域に流入し始め、とりわけ清の嘉慶年間（1796～1820）に行なわれた「改土帰流」（少数民族の土官を改めて州県府を建て、役人を漢族あるいは旗人に変える政策）により、多くの漢族が流入してきた。こうして新しく流入してきた外来人を“客家”や“客民”と呼び、それと区分するために“土民”や“土家”（土地の人）という言葉が出現し、強く意識された。従って、土家族という族称自体は清代に生まれたことになる。

土家族の言語は、漢蔵語系蔵緬（ぞうめん）語族に属しているが、固有の文字がないので、漢語を以て代用させている。発音についての特色は中国語に見られる巻舌音(3)がなく、nとfの発音がlとhに変わり、üがiに、angがanになるという特色がある。また語順については、たとえば中国語では主語＋動詞＋目的語となるが、土家語では主語＋目的語＋動詞となる等の特色がみられる。ただ、漢化が進みつつある現在、土家語を話せる人は減少しているそうである。

1990年現在、土家族の人口は572万5049人で、その内訳は湖南省が179万4855人で最も多く、次いで湖北省に177万1004人、四川省に107万6529人、更には湖南・四川の隣接する貴州省に104万5455人となっており、この４省で土家族の全人口の99％以上を占めている。現在のこうした土家族の居住地域は、宋代以降(4)に制度化された土司（少数民族の族長で世襲の官爵を与えられた者）の管轄地域とほぼ一致しているのである。

本稿は、この土家族に着目し、擺手節という祭りの紹介とその祭りで行なわれた茅古斯の内容と特色を明らかにすることを目的とするものである。(5)

2．擺手節について

擺手節（Bǎi Shǒu Jié）の「擺手」という語句は、土家族に昔から伝わる擺手舞に由来している。擺手舞とは、土家族の伝統的舞踏のことである。たとえば、清代の土家族文人・彭勇行の「竹枝詞」には、当時の擺手舞の様子を次の如く述べる。

福石繡屏屏繡多　　福石　繡屏　屏繡　多く

浪撃石鼓聲聲和　　浪撃　石鼓　聲聲　和す
土王宮里人如海　　土王宮の里（うち）　人　海の如く
共慶新年擺手歌　　共に新年を慶び　擺手して歌ふ

当時「人如海」の様に、多くの土家族が参加して擺手舞が盛大に行なわれていた。また、「共慶新年」という表現から明らかな如く、擺手舞は新年に行なわれ、祖先を祀り豊作を祈る舞踏のことである。そして擺手節とは、この伝統的舞踏である擺手舞をメインの出し物として、湖南省の龍山県政府が以下に述べるような様々な土家族の伝統芸能を総合させて主催した祭りのことである。

今回行なわれた土家族の擺手節は第１回目で、その正式名称は「'93中国湖南（龍山）土家族擺手節」といい、1993年10月22日，23日に湖南省龍山県で開催された。龍山県は湖南省の西北部に位置し、湖北省までは僅かに７キロ，四川省までは70キロの所にあり、まさに古来から土家族が住んでいたと言われる湖南・湖北・四川３省の隣接する山岳地帯である。現在、龍山県には約23万人の土家族が住んでいる。

まず、今回の擺手節の内容を紹介しておく。

初日（10月22日）午前には、大型民族芸術団体舞“擺手迎吉祥”が行なわれた。この“擺手迎吉祥”舞踏の種類と順番は、次の通りである，

(1)　掃堂納福
(2)　龍飛風舞
(3)　普風姿
(4)　擺手奮進

この中の、たとえば龍飛風舞では女性が風を、男性が龍を演じており、これは土家族の祖先が龍によって育てられ、風に包まれて成長したという伝説を想起させる。また３番目に行なわれた普風姿では、女性のもつ黄色の布に土家族の刺繍“土家織綿”を用いており、これは色彩豊かで伝統性を感じさせた。しかし、全体を通して踊りの動作や衣装等が洗練され現代化された感じは否めず、筆者は龍山県政府計画委員会主任の張正武氏にこれらの踊りの来歴を質問したところ、土家族の伝統の踊りを現代流にアレンジし改変を加えたものだと言うことがわかった。龍山県は辺鄙な山岳地帯にあり、現在でも外国人に開放されていない未開放地域であるとはいえ、以前に比べれば今は外部との交流がはるかに盛んになっている。従って、“擺手迎吉祥”は、土家族固有の舞踏が外部の影響を受け、変化しつつある過程を垣間見せていると言えよう。

午後には、南月宮という寺院で民族芸能の上演が次の順番で行なわれた。

(1)“梯瑪”表演
　　踩八卦
(2)　打溜子
　　尖布里
　　蒸擺尾
　　倒五槌
(3)　小擺手
　　小祭祖

小擺手

茅古斯

ここでこれらの(1)〜(3)の民族芸能について少し説明しておく。

土家語のティマという発音に漢語を当てはめた表記が梯瑪(ティマ)で、土家族の巫師のことである。土家語で“ティ”とは女性の生殖器を表しており、“マ”とは動物の馬を表わしている。従って、梯瑪は本来の土家語の意味では“馬氏族の神女”ということになる。しかし伝えられている限りにおいては、梯瑪は男性で、清代の“改土帰流”以前はその権力が大きく、土家族の村の祭祀，婚姻出産，紛争和解，願掛け，お礼参り，占い等全てにかかわっており、世襲であった。“改土帰流”以降は梯瑪の権力が小さくなり、今では伝統的な巫術はほとんど行なわれなくなったそうである。この梯瑪の巫術の様子を演じたのが、(1)“梯瑪”表演の踩八卦である。これは歌をうたいながら演じられる。ただ、その歌は土家語でうたわれるので筆者には理解できなかったが、幸いに『土家族儀式歌漫談』に“梯瑪歌”の１つが漢語に訳されて掲載されているので、今その一段を訳して紹介しておく。(6)

おお
私の馬頭仙人よ
赴くのなら
出発の酒を飲んでくれ
私の馬尾仙人よ
赴くのなら
出発の酒を飲んでくれ
ああ
私の宝都海馬にのって
風のように動き　雲のように走る
九都の役所は前にある
おーい
大旗は前にあって林のように多く
小旗は後にあって水の流れるよう
角笛を吹きはじめる
シオレ　シオレ
天は動き　地はうち震う
陰兵は前にいる
陽兵は後にいる
外にむきだしの歯は鋭く　鋭利な刀のよう
脚の指は鋭く　刀の刃のよう
龍がいたならば龍と戦い
蛇がいたならば蛇と戦う
左の方へむりやり進んでいく
右の方へむりやり進んでいく

陰兵は前にいて殺気大きく

陽兵は後にいて威風をふるう

次に、(2)打溜子について説明すると、それは打楽器を用いた合奏曲である。溜子隊は4人で構成され、婚姻や新年などの慶事に集まり、打溜子が演奏される。打溜子の演奏に用いられる楽器は、頭鈸，二鈸，馬鑼，大鑼の4つの青銅楽器である。リズムは複雑で、音色も変化に富んでいる。土家族の男の子は5，6歳頃から老芸人について打溜子を学び、見よう見まねで自然に覚えていく。それは次々に踏襲され、次第にしきたりとなっていくのであった。

南月宮において最後にとり行なわれた(3)小擺手は、土家族の伝統的舞踏である擺手舞の一種で、擺手舞はその規模によって大擺手と小擺手に分かれる。小擺手への参加者は30～50人、大擺手は数百人であり、時には数千人の規模になることもある。[7]土家族であれば老若男女にかかわらず、誰でも参加できる。まず、始めに土家族の先祖に対して祭礼を行なう。これが小祭祖である。龍山地域ではその祖先である八人の土王、すなわち八部大王に対して祭礼を行なう。その後、土家族の人々は大きな輪をつくり踊り始める。[8]その動作は、たとえば両手を胸の前で3回たたく（蚊をたたく動作）、2人が向い合って進んだり後戻りしながら踊る（牛の喧嘩）、左手を腰にあて右手を口にもっていく（物を食べる動作）、両手で棒を握ったかたちをつくり、胸の前でぐるぐる回す（団子をこねる動作）など多彩で、これらはいずれも土家族の日常生活・農耕活動の動作をかたどっている。

以上の様にして、擺手節の1日目は終わり、翌日の10月23日には大擺手が行なわれた。特に夜、かがり火をたいて行なわれた大擺手は盛大で、その規模は500～600人ぐらいであった。その踊りの動作・内容は、小擺手とほぼ同じで、土家族の日常生活・農耕活動をかたどっており、かがり火の光と踊りが一体となって、独特の雰囲気を醸し出していた。

2日間にわたって行なわれた今回の擺手節は、その規模といい、水準といい、龍山県政府が並々ならぬ力を注いだものであった。擺手舞を中心とした、この様な土家族の伝統芸能を総合させた大規模な祭りは今回が第1回目で、以後も2回、3回と続けていくとのことである。

3．茅古斯と小擺手

茅古斯（Máo Gǔ Sī）とは、前述した擺手舞（小擺手）の途中で行なわれ、祖先を祀り、邪気や災いを払い、吉をもたらす儀式である。そして、張子偉によれば茅古斯はまた中国の演劇の源流としても位置付けられるが、残念ながら茅古斯のストーリーを詳しく紹介した先行文献は、管見の及ぶ限りないといってよい。[9]筆者自身、実際に茅古斯を見たが、セリフに土家語が用いられるので理解しにくかった。そこで、今回の祭りに同行した、土家族出身で湖南省の湘潭大学で教鞭をとっている彭玉屏女士（40歳）に、主として龍山地域で行なわれている茅古斯のストーリーについての文章を草していただくようにお願いした。彭女士は実際に見聞したことに加えて、龍山に在住の母親向天峨（73歳、土家族）に取材し、茅古斯のストーリーをまとめてくださったので、以下それを訳出して紹介する。（尚、土家語の発音表記については、彭女士よりいただいた文章通りに、ローマ字表記を用い、ローマ字の上には声調記号を付している。）

*

茅古斯は、擺手舞の中の一種の物語の筋をそなえた原始的演劇活動である。龍山一帯では俗に“玩拔帕”あるいは“做故事拔帕”という。“拔帕”は土家語で、漢語に訳すと“老头子”である。茅古斯では、主に土家先民の狩猟，農耕等を上演するが、それはすでに舞踊の雛形をそなえており、更には演劇性をも具有している。両者が入り雑じり、渾然一体となった祭祀性舞踊を形成している。

草を以て衣服とするのが、茅古斯の大きな特徴であり、今回茅古斯の服装は全て藁を用いて肩までまとい、頭の上で藁をくくっていた。

今回の茅古斯の上演に参加した人数はおおよそ10人ぐらいであった。その中の１人が“婆帕此”、すなわちおじいさんを演じ、１人が“帕尼此”、すなわちおばあさんを演じ、その残りが子孫、すなわち小茅古斯を演じる。“婆帕此”は“拔普卡”といい、“帕尼此”は“帕帕”といい、祖父、祖母という意味である。その他に年長で威信のある人が仙人の生まれかわりを演じ、彼は藁をぐるぐるまきつけた棒をもち、全ての茅古斯の前にたつ。

仙人の生まれかわり（以下“仙人”と称す）がたずねる：Sé kǎi lē ēng jī？（あなたがたはどこから来たのですか？）

茅古斯の中の年長者（以下“長者”と称す）が答える：Gǎ nī tāi bī ǎ sā lē ēng jī。（我々は向かいの山から来たのです。）

仙人はまたたずねる：Sé kǎi ǒng bō lā？（あなたがたはどこに住んでいるのですか？）

長者は答える：Gǎ nī zōng sū bǎ tī ǒng bō lā。（我々はシュロの樹の下にすんでいます。）

仙人：Sé già gǎ lā？（あなたがたは何をたべますか？）

長者：Gǎ nī zōng zī bǎ lāi gǎ nē xì。（我々が食べるのはシュロの実です。）

仙人：Sé gé ǒng cuō ǒng xī lán？（あなたがたは住むのに慣れましたか？）

長者：Gǎ nī ǒng cá。（住み慣れました。）

仙人は次のように考えた。ここに住むのであれば労働をし、食物になるものを植えねばならない。ただシュロの実を食べるだけではどうであろうか？仙人は彼らの仕事の段取りをしようと考えた。

仙人：Sé gé ǒng bō, kuǒ sá gà duō。（あなたがたはここに住む以上、たきぎを刈り、山を焼かねばなりません。）

＊彭女史の解説（土家族は一般に全て山に住んでいる。平地はきわめて少ない。“たきぎを刈り山を焼く”とは、山の雑草をすべて刈りおわり、１週間後刈った雑草をその地で焼きつくしてしまうことである。トウモロコシを植える季節になると、トウモロコシの種をそこにまき、刈り入れ時に到るまで全く肥料を施す必要がない。焼いた雑草の灰が肥料となるからである。）

この時、茅古斯全員が答える：Cǎ gǎ nī jiu gāi yī。（我々は刈り終わりました。）

言い終わった後、婆帕此が前に帕尼此が後に、その残りの茅古斯は２人の後ろについて擺手舞を踊り始める。その動作は、右手に鎌をもち雑草を刈りながら歩くことを形どっている。刈り終わった後、茅古斯全員はまた仙人の膝下に到り、仙人の指図をあおぐ。

仙人：Sé kǔ o sā gà ji liāo gà ji dā？（あなたがたは刈り終わりましたか？）

長者：Gà ji liāo（刈り終わりました。）

仙人：Sé gà yē gà jī liāo, ēng sī jā wǔ duō wǔ lē jiu diàn duō。（刈るのが終わったなら、刈ったも

のを焼きつくさねばなりません。焼きつくしたら種をまかねばなりません。)

茅古斯全員：Cǎ gǎ nī jiu gāo yī。(わかりました。行ってやります。)

この時全員の茅古斯の擺手の動作は、種まきをし雑草をぬくというものである。踊り終わった後、茅古斯全員は仙人の前に走ってきて仙人の手はずをきく。

仙人：Sé gāo ji liāo gāo jī dā？(やり終わったのですか？)

茅古斯全員：Gāo jī liāo。(やり終わりました。)

仙人：Sé mū lā cē mō fū sī duō。(あなたがたはちゃんと管理しなければなりません。)

仙人：À jē liāo jiu ò lē cào ěng jī duō。(成熟したら、刈り入れて家へもって行かねばなりません。)

茅古斯全員は、仙人の話を聞いた後、また輪になって踊り始めた。舞踊の動作は全て野良仕事の動作と似ている。たとえば、トウモロコシの茎をぬいてトウモロコシをもいで、もいだトウモロコシを背中のかごに入れるなど。最後にはもいでしまったトウモロコシを全部背負って帰る。全ての茅古斯はまた仙人の前に行き、仙人の指図をあおぐ。

全ての茅古斯の中から男２人がそれぞれ新郎，新婦に扮装する。

仙人：Sě mū la gōng fū fǔ nì gāo jī liāo gāo ji da？(あなたがたは、今年の野良仕事は全て終わったのですか？)

茅古斯全員：Fǔ nī gāo jī liāo。(全部終わりました。)

仙人：Gì kà fū, gì kà niē bā bā nǎ duō bù cuō ǎ duō。Lá kuō lē yē cé mō gào duo。(もうすぐ旧正月です。もちをつく準備をしなければならないし、嫁をめとらねばなりません。旧正月をすごした後は、また頑張りましょう。)

この時、２人が両手を交差させて籠をつくり新婦をもちあげて走り、ウオーと天にまで届く声を出して籠を上・下させ、最後に拝天地の儀式[10]を挙行しようとする時、茅古斯達は先を争って新婦とこの儀式をして、結婚しようとする。

拝天地の後、仙人は言う：Bū cuō ǎ liā eng si jā bā bā bū do。(新婦を出迎えて、あなたがたは皆一緒にもちをつかねばなりません。)

全ての茅古斯は聞いた後、また輪になってもちをつく動作をし始める。もちをつき終わった後、茅古斯はまわりでにぎやかに見ていた人にもちをわけあたえて食べさせる。なぜならば、土家族は非常に客好きでとても義侠心を重んじ、友達に対して忠実で真心があるからだ。

茅古斯の全ての上演動作は、春の農耕から秋の収穫さらに旧正月まで、すべて農耕の仕事と分かつことができない。上演中、茅古斯は両膝を少し曲げ、尻を沈め、頭をゆらし、肩をうち震るわせ、足ぶみをしてかがんでいる。土家族はこの動作を“lì lì kì sī”と称す。漢語に訳すとイヌノミをうち払う動作となる。上演中、うち震いしゃがむ動作は、人類の祖先が猿から人に到り、両脚で直立して歩行する初期の姿を想像させるのである。

*

以上が彭女史よりいただいた茅古斯のストーリー及びその解説である。茅古斯は今日では擺手舞(小擺手)と一体になって行なわれる。たとえば、土家族の風俗について記した『中国土家族習俗』においては、「茅古斯は、すなわち土家族の擺手活動の中で、擺手舞の間に行なわれる一種のストーリーをもった上演活動」[11]と規定する。また、筆者が参観した茅古斯も実際小擺手の踊りの途中で、演

者が登場して茅古斯の上演が始まるという形式で行なわれた。すなわち、踊りがおどられている途中に、突然奇声をあげて藁をかぶった茅古斯の一団が踊りの中に入ってくる。それに応じて、今まで小擺手を踊っていた人々はその輪をといて、茅古斯達に場所をゆずるようにして擺手堂の外側に座り、観客と一緒になって今から演じられる茅古斯を食い入るように見つめるのである。[12] つまり、小擺手の途中で茅古斯が演じられると、小擺手を踊っていた多くの土家族は、茅古斯が始まったその瞬間に、参加者から今度は茅古斯を見る観客へと移ることになる。これは、土家族の人々が小擺手の中で日常の生活文化や農耕の技術・活動をかたどって踊り、そうした文化・技術を体を通して経験していた側から、今度は茅古斯の中で仙人が土家族の子孫へ文化や農耕の技術を授ける過程を第三者の立場から見る側へ移ったことを意味する。とすれば、小擺手を踊ることによって、土家族に伝えられてきた文化と技術をいわば模擬的に体験し、次いで茅古斯を見ることで仙人が小擺手達に授けた文化・技術を頭でしっかり確認し、跡づけていることになる。ここに踊りによる体験と、ストーリーをもった劇による確認という役割が絶妙に分担されているのがわかる。つまり、今日の茅古斯はこの様に擺手舞と一体になることによって、土家族の伝統文化・技術の伝承の過程における有効な場を提供していることになる。

さて、この茅古斯と擺手舞の関連については、湖南湘西地方一帯に流布している次の様な由来伝説がある。[13]

> 伝説によると、烂杆子（食べるのは好きだが働かないなまけ者）がいた。彼は仕事をするのが嫌で、村から出て行きよからぬことをしていた。3年後、彼はよその土地で働かずに食べていく生活はつらいと感じ、そこでまた村に逃げもどってきて、一途に仕事をしようと思った。途中、幾山河を越えて、体はわずかに衣服だけとなっていたが、その衣服はあちこちひっかかったりささったりしてぼろぼろになっていた。家に帰ってきた日、ちようど調年擺手舞に出くわした。彼は恥ずかしくて堤防に積んであった稲草の中にかくれた。後になって村人たちは彼をみつけ彼の境遇に同情し、後悔して帰ってきたことを歓迎した。そして、慈しんで関心をよせていることを示すために、村人は彼を引っぱり一緒に擺手舞をおどり歌をうたった。烂杆子はどうしようもなくただ少しの稲を引き抜いて体にくくりつけ、醜い姿をおおいかくした。この扮装はかえって土家人の興味を引いた。この後、次第に移り変わって筋のある茅故事となり、更に流伝し非常に好まれた。後で烂杆子の故事を無言劇に編成して調年擺手の時に上演して、一生涯よく働くようにと後世の人々を教育したのである。

この伝説によれば、なまけ者の烂杆子が自分の体の破れた衣服をかくすために稲をかぶり、擺手舞に参加したことによって茅古斯が生まれたということになっている。もちろん、これは伝説であって全てを信じることはできないけれども、しかしこの様に茅古斯と擺手舞（小擺手）が関連して、それらが一体となって発展してきたことは、今日茅古斯が小擺手の中で行なわれるという形態を考え合わせても、疑いのないところであろう。

4．来訪神としての茅古斯

これまで茅古斯における演劇的側面を考察してきたが、それはあくまで茅古斯が発展するのにした

がって、次第に付加されてきた要素だと思われる。茅古斯の本質は、そうした演劇的要素をとり除くと、それが正月に行なわれる儀礼だということになろう。本章では、この茅古斯の儀礼的側面に着目して考察を進めたい。

茅古斯の最も大きな特色は、藁を頭の上でくくり、その藁をすっぽりと被って腰の下まで垂らし、上半身を覆う扮装をしていることである。こうした扮装は、日常生活から離脱した特別の存在を表しており、所謂マレビトや異人の姿を我々に想起させる。そして、前述した様に茅古斯の中で、仙人が登場し、土家族の子孫である小茅古斯達の生活を心配して、焼畑、トウモロコシの栽培、結婚、餅つき等を指示していくストーリーは、まさに子孫に農作業の技術や日常生活の方法を伝授し、それを継承させようとする様子を表している。更に、この茅古斯の儀式の行なわれる場所が、土家族の先祖を祀っている擺手堂であることを考え合わせると、茅古斯は正月に他界から出現して子孫を訪れ、技術を授け祝福に来る土家族の祖霊、祖先神であることがわかる。藁を被った姿は、来訪神の衣装であり、遠方から訪れた神の姿をかたどっているのである。

このように1年の決まった日に異形の扮装をした神が村を訪れるという習俗は、周知のごとく日本でも東北地方から沖縄の西表島に到るまで広く分布している。なかでも、鹿児島県知覧町のソラヨイと呼ばれる儀式は神が茅を頭から被って訪れて来るので、その外観は茅古斯と極めて類似している。ソラヨイは、旧暦8月15日の夜に茅を被った子供達が村を訪れる土地儀礼、祝福儀礼であり、小野重朗によると、山にある茅を被り、山から下ってくる神なので山の神と位置づけられる。更に、茅は焼畑や切替畑[14]に生育または半栽培される植物なのでこれを被ってくる神は、いわば山の神の変身した畑作の神であると言う。

ここで、茅古斯について考えると、前章でみたように仙人が子孫である小茅古斯達に焼畑やトウモロコシの栽培を指示していることは、その昔土家族が焼畑を生業としていたことを表しているのではないかと思わせる。確かに、筆者が訪れた龍山地域は山間地帯で、鍾乳洞が点在する石灰岩質の土壌であったが、これは稲作技術の劣った昔はあるいは畑作を中心とした畑作文化圏に属していた可能性が高い。また、茅古斯は以前はその名の通り茅（かや）を用いて扮装していたと思われる。この茅は、前述のごとく焼畑に生育または半栽培される植物である。従って、茅古斯はソラヨイと同様に畑作文化圏に見られる来訪神事であり、山の神または畑作の神であったといえよう。ところが、現在の茅古斯では藁を用いて扮装している。これは、その地域が畑作から稲作へと移り変わっていったことを物語っているのではないか。ソラヨイでも、その扮装が茅から藁へと変遷している地域がみられるが、これは稲作化の浸透の結果である。現在、土家族が稲作生活を営んでいることも、土家族地域における畑作から稲作への変遷を裏付ける[15]であろう。

そして、こうした茅古斯の儀式は一方では次第に芸能化され、土家族の伝統的舞踏擺手舞と結びつき発展してきた。従って、茅古斯には前章でみたような演劇的側面も見出せるのであった。

5．おわりに

土家族の居住地域は、漢族の周辺に位置しており、古来よりしばしば漢族との交流が行なわれてきた。たとえば、土家族の文化が漢族の文化と巧みに融合した例として、中国の文学史のなかの竹枝詞

という七言四句の韻文形式があげられる。これは、唐代の劉禹錫（772～842）という詩人が、当時地方で流行していた民歌をとり入れて、その形式を確立させたといわれている。ところが、その民歌はどの様なものであったのかということは、これまでの中国文学の研究において詳しくは明らかにされていなかった。しかし、土家族の調査を行なう過程で、この竹枝詞は実は劉禹錫等の詩人が土家族居住地域で聞いた民歌に基づいて創作していたことがわかった。これは漢族の文化が土家族の文化を巧みに融合したことを端的に示している。また、漢族との交流[16]によって、土家族はある面では漢化が進んでいる。今回の擺手節のなかで、それが顕著にあらわれたものは、初日に行なわれた“擺手迎吉祥”の踊りであり、前述した様にかなり洗練されて、土家族独自というよりも所謂現代化（漢化）された創作ダンスの様になっていた。

この様な土家族と漢族の交流とともに、今一つ土家族と漢族の周辺地域の文化との関連も看過できない。たとえば、前章でみた土家族の茅古斯の儀式と鹿児島県知覧町のソラヨイ等の日本の来訪神事に共通点が見られるのは甚だ興味深い。これらは時間と空間を超えているが、こうした共通点が見出せるのは決して偶然ではないであろう。茅古斯とソラヨイを詳細に比較して分析することは今後の課題としたいが、日本と中国の少数民族という、いわば東アジアにおける漢族の周辺地域に位置する文化を比較し研究することによって、それぞれの文化をこれまでとは違った角度から解明できるのではないか。

漢族との交流および漢族の周辺地域の文化との関連という二つの視点を基軸として、今後土家族をより一層総合的、複合的に考察する必要があるが、本稿がその一端を担えれば所期の目的は達成できたと考える。

注

(1) 拙稿「中国少数民族“土家族”の文学」（鹿児島大学文科報告29－1、1993年）及び「土家族“擺手舞”考」（鹿児島大学文科報告30－1、1994年）参照。

(2) 土家族の起源については諸説あるが、古来からの多くの文献や民間の説話からみると、古代の巴人の後裔とする説が極めて有力であり、本稿もこの説を採用する。

(3) S．R．ラムゼイ『中国の諸言語』（高田時雄他訳、大修館書店、1990年）によれば、土家語は「まだ公式の分類がなされていない」と指摘する。一方、田徳生・何天貞等『土家語簡志』（民族出版社、1986年）では、土家語は漢蔵語系蔵緬語族に属すと述べる。土家語がどこに帰属するかについては、この様に説が分かれているが、本稿ではひとまず『土家語簡志』に従っておく。今後の詳しい研究がまたれる。なお、以下に述べる土家語の発音・語順の特色についても、『土家語簡志』を参照した。

(4) 人口統計については、『中国1990年人口普査資料』（中国統計出版社、1993年）に基づく。

(5) 筆者は、1992年９月から93年１月まで、鹿児島大学より派遣されて湖南省の湘潭大学に滞在し、その間、湘西土家族苗族自治州の州都吉首市に行き、土家族の調査をする機会をもった。また、1993年10月22日、23日に湖南省龍山県で行なわれた'93中国湖南（龍山）土家族擺手節を参観し、様々な伝統芸能を見ることができた。本稿はこの２度の調査に基づくものである。なお、筆者は

本来中国文学を専攻としているので、文化人類学、民族学に関する知識に乏しく、また土家族についての知識の蓄積もまだ日が浅い。従って、誤解等があれば、その指摘をしていただければ幸いである。

(6) 中国民間文芸出版社、1989年、49頁～50頁所収。

(7) 擺手舞については、拙稿「土家族“擺手舞”考」(鹿児島大学文科報告30－1、1994年) を参照されたい。

(8) 八部とは、土家族の八つの部落の意味で、八部大王とは古の八人の族長－敖朝河舎、西梯老、西呵老、里都、蘇都、那鳥米、拢比也所也冲、接也飛也那飛也の八人である。

(9) 茅古斯の専論として筆者が目睹しえたものとして、唯一、張子偉「“毛古斯”芸術品格解析」(中国少数民族傩戯国際学術討論会論文、1991年) がある。(毛古斯と茅古斯は同じである)。この論文は茅古斯の分析を通して、茅古斯が中国における演劇の源であることを証明しようとするものである。筆者も茅古斯が演劇的側面を具有すると考えており、張氏の見解に賛同するものである。ただ、本稿は茅古斯を単独で分析するのではなく擺手舞のなかで位置付け、更に来訪神としてとらえるもので、張氏の論文とはその主旨を大きく異にする。また、張氏の論文は、茅古斯を写意性、虚擬性、総合性、仮定性の四方面から分析するが、詳しいストーリーについては言及していない。また、茅古斯についての専論ではないが、諏訪春雄氏は「季節に来訪する神」(『日中比較芸能史』所収、吉川弘文館、1994年) のなかで、毛(茅)古斯を「民族に最高神から民族の祖神たちが文化を授けられた過程を来訪する神の行為として表現した民俗行事」と位置づけている。これは、非常に示唆に富み、筆者は賛同するものである。あわせて参照されたい。

(10) 旧時結婚式の時行なわれる新郎新婦の礼の一つ。

(11) 『中国土家族習俗』(中国文史出版社、1991年) 166頁参照。

(12) 擺手堂とは、擺手舞が行なわれる所で、多くの場合は土王を祀ってある寺院である。今回は南月宮が擺手堂であった。

(13) 『土家族民間故事選』(上海文芸出版社、1989年) 152頁所収。

(14) 『南九州の民俗文化』(法政大学出版局、1990年) 219頁～246頁参照。また、ソラヨイについての調査と分析は、下野敏見「知覧町の民俗芸能」(知覧文化第14号、1977年) に詳しいので参照されたい。

(15) 前掲『南九州の民俗文化』244頁参照。

(16) これについては湘西土家族苗族自治州の州都である古首市に調査に行った際に、土家族研究専家である吉首大学彭南均教授 (土家族出身) より指摘していただいた。なお、土家族と竹枝詞の関連については別稿を予定している。

※ 付記…本稿を草するに当たり、中西裕二、福満正博、大木康の諸先生から御教示と資料面での便宜を計っていただきました。ここに感謝の意を表します。

(1994. 9. 1)